

# IT水滸伝

## 第二部

星野たかし

## 第二部 目次

- 第一話 プラバカル
- 第二話 R I S 発進
- 第三話 トレーニングセンター
- 第四話 データベースの高山
- 第五話 プレゼント
- 第六話 A I 図書館
- 第七話 ネットワークの山田
- 第八話 3次元の白川
- 第九話 C言語の佐々木
- 第十話 1988年忘年会

## 第一話 プラバカル

梨絵と会ってから二、三週間が過ぎた。小林は、梨絵が会社を辞めたというニュースを町田から聞いたが、先に自分の道をつけるべきだという思いが強く、仕事が忙しいのを幸いに、梨絵に連絡するのを遠慮していた。

「小林さんのところで働くことができますか？」

最後に梨絵が言った言葉が頭から離れなかった。梨絵が自分を頼ってくれているということが、今の小林にはうれしさよりも重い責任感として押し掛かっていた。正直、今は自分の食い扶持でアップアップで、梨絵の仕事の面倒を見る自信がなかった。ある夜自宅に珍しい人から電話が入った。

「Aap kese he?」

インドのヒンディー語であった。「元気かい？」という意味であった。さらに「私を忘れたのかい？」とヒンディー語で続けた。最後に日本語で、

「私はプラバカルさんです。」

と自分に「さん」をつけて言った。十年前にインドの大学で一緒だったプラバカルだった。小林がニューデリーに語学留学していた時に、工学部の電子工学を専攻していた男であった。日本に興味があつて、時々キャンパス内のキャンティーンでチャイを飲みながら話しているうちに、とても仲のよい友達になった。その後の小林の商社時代には、インドのカラーテレビ組み立て工場の工場長を任せられており、小林がインド出張時に2、3回会ったことがあった。

プラバカルは、今仕事で東京に来ており、明日、関西に出るので、会わないかという話であった。明日は丁度、土曜日で、

「土、日共、空けておくから是非家に泊まってください。」

とヒンディー語で言った。

プラバカルは、翌日の夕方、新幹線で新大阪駅に着いた。大学時代から数えて10年、最後に商社マンとして会ってから5年が経っていたが、以前と同じ姿だった。背は小林と同じくらいだが浅黒く痩せ型で丸いガンジー眼鏡をかけ、ガンジーの青年時代のような清楚でインテリ顔をしていた。出身はインドの南の方で、実は彼の母国語はヒンディー語ではなかった。

インドは州ごとに大きく分類された言葉だけでも17言語もあった。ただ大きく北と南という風に二分類でき、北インドはインド・アーリア言語に属し、南インドは、ドラビダ系言語に属する。政府はヒンディー語を公用語にしているが、特に北のヒンディー語との言葉の違いが、英語と日本語の差ほど違う南インドでは、事実上の共通語は英語であった。彼も英語ですべての教育を受けたため、どちらかというとな英語が母国語のようになっていたが、小林が大学でヒンディー語の練習相手を探していたということもあって、小林に対しては、わざと、ヒンディー語で話しかけていた。プラバカルはインド式に両手を合わせて合掌し、

「**Namasukar**」

と挨拶した。「こんにちは」という意味である。そして次に、固く握手をして手を大きく振って懐かしさを表現した。プラバカルは、

「ヒンディー語じゃなくて、英語で話していいか？」

と小林に聞いた。小林も、ヒンディー語は長い間使っていないので英語の方が楽だと言った。

新大阪駅から小林の家までは、車で30分ほどだったが、車の中で、2人は5年間の距離を縮めようと、お互いの歴史を語った。そして、プラバカルがカラーテレビ工場長を辞め、現在、ソフトウェア開発のマネジャーをしていることや、今回の来日は、日本の企業からソフト開発の注文を取るために来た、ということ語った。ただ、日本はアメリカと比べてとても保守的で、外国に仕事を出すことなど考えたこともない企業が多く、苦戦していた。小林は、プログラミングに関しては、値段の安さだけではだめで、日本の商習慣や日本語対応など、さまざまな問題を解決しなければならないことを告げた。

家に着くと留守番電話が入っていた。町田からであった。町田に電話をし、元気な声を聞いた。

「小林さん、お久しぶりです。あの、この間梨絵さんに電話したら、もうだいぶ落ち着いてきたみたいで、一度3人で食事でも、ということでしたけど、小林さんの都合どうですか？」

小林は、梨絵が少し落ち着いたということを知って安心した。

「今、僕のインドの友達に来ていて、日本のプログラム事情について聞きたがっているけ

ど、明日、時間あるかな。僕では、CAD以外のプログラムの事情が分からないんで。」

「OK。明日の12時地下鉄なんば駅の例のところで、どうですか？僕、梨絵さんも誘ってみます。」

町田が元気よく言った。小林は梨絵には自分で電話したほうがよいかと思ったが、町田がそう言うので任せた。その夜、小林とプラバカルは夜遅くまで話し合った。

「すみません、遅くなって。」

小林とプラバカルは、昨夜遅くまで話していたため朝起きるのが遅くなり、待ち合わせ時間に遅れてしまった。町田と梨絵は、長い間待っていたようであった。

「昨日、遅くまで話してたんで、それで、急いで家を出たけど、間に合わなくて、焦って電車の中でも走ってました。」

小林は、早口で言い訳をいいながら、気になる梨絵の方ちらちら見た。梨絵は、白いシャツとベージュのスラックス、濃い緑のサンダル履きという軽装だった。夏の太陽を真上から受けて眩しいのか、時々手で庇をつくっていたが、小林の冗談を聞いて、曇りのない満面の笑みを返した。久しぶりに見た梨絵は少し痩せて、顔が青白く見えたが、小林は屈託のない綺麗な笑顔に少し安心した。小林はプラバカルを紹介した。

「こちら、プラバカルさん。僕のインド留学時代の友人で、今仕事で日本にきています。」

「**How do you do?** 私はプラバカルです。」

「**How do you do?**」

町田と梨絵がプラバカルと握手した。町田が言った。

「さあ、早く食事に行かないと、どこも一杯になりますよ。インド料理ですか？**Do you want Indian food?**」

と町田が下手な英語で聞いた。

「**I`m a vegetarian. But I don`t care Indian food this time. I`d rather try different food.**」

「彼はベジタリアンだけど、インド料理にはこだわらないと言っています。」

小林が町田に通訳した。町田が、

「じゃあ例のどこ行きますか？**Let`s go Rei no place.**」

と訳のわからない英語を使って皆を案内した。

案内した所は、以前君江と4人で行った中華料理店、梁山泊であった。小林が心配そうに、

「ここ、ベジタリアン大丈夫かなあ？」

町田が自信たっぷりに、

「大丈夫です。中華料理にはベジタリアン用がたくさんありますから。」

偶然、二年前座ったのと同じ席になった。小林と梨絵が向かい合わせに座り、町田とプラバカルが向かい合わせに座った。丁度、君江が座っていたところにプラバカルが座るような形になった。町田は目をギョロツトさせて言った。

「僕は無神論者ですが、この偶然は何か意味があるような気がします。」

そして、「今日はいいことがあるよ」というように、ひょうきんに黒のスクウェアメガネの中の目玉をくるくる回した。プラバカルは日本語が解らず、町田は英語があまり解らなかったなので、取り敢えず英語で話すことにして、小林と梨絵が町田に交互に通訳する形を取った。

プラバカルはにこにこしながら、小林のインド留学時代を語った。小林がインドの国民服である真っ白いクルタ（シャツ）とパジャマ（ズボン）を着て街に出かけた時など、誰もインド人と疑わなかったくらいインドに馴染んでいた。そして、日本に帰るころにはヒンディー語も自分よりうまくなっていたと語った。

料理が運ばれ、町田がプラバカルにベジタリアン料理の説明をした。

「**This is pure vegetarian food. No meat even in source.**（これは、純菜食です。ソースにもお肉は入っていません。）」

町田の英語は、発音から文法まで無茶苦茶であったが、一々席を立ててお皿を指さしながら全身で説明する迫力に押されて、プラバカルも目をまるくして聞き入った。

「化学調味料に、豚から抽出した触媒が使われているのが気になりますが、これは、さすがに英語でうまく説明できないので、小林さん訳してもらえますか？」

小林は、「もうええわ」という、あきれた顔をして、町田を無視した。そして、

「**Let`s start!**」

大きな声で言い、プラバカルのお皿に料理を分け始めた。梨絵は、町田と小林のやり取りを聞きながら、笑いをこらえるのに苦労しているようであった。

食事も終わりかけ、デザートメニューを町田が吟味している時、プラバカルが真剣な顔をして、今回の旅行の散々たる現状を語った。インドでプログラムの開発をすれば、日本の10分の1の価格でできるのに、まだ、誰も興味をしめさないのが不思議だと言った。アメリカのナサ（航空宇宙局）などからすでに注文が入っており、皆が心配しているような、企業機密のコンフィデンシャルな問題などは、すでに解決済みであると語った。インドは優秀なプログラマが無尽蔵にいて、商品がプログラムなので、外貨の問題や、インド特有の政治的、宗教的問題でトラブルになることは、ほとんどないということを熱っぽく語った。

80年代、インドと言えれば一般的にはまだまだ神秘の国インドというイメージが強く、ヨガや宗教という文化面の話題がほとんどで、あとは、貧困、衛生がよくないといった負のイメージが強かった。ただ近代化の波は確実にインドにも押し寄せ、世界中からスピニアウトした若者が、理想郷を求めてインドに旅するというヒッピーの時代がそろそろ終わりを告げようとしていた。日本の商社は以前からインドに入っていたが、外貨のない貧乏国で、思っきり灰汁の強いインド商人を相手に対等に渡り合える日本商社マンはまだまだ少なかった。しかしそんな中で、81年にスズキ自動車と地元のマルチ社との合弁で自動車会社が設立され、インドの複雑な政治と腐敗した行政に悩まされながらも、日本人の勤勉とねばり度でようやく事業が軌道に乗り始めたところでもあった。現在、インドと言えればIT大国と言われるが、そのようになったのはもっと後の話で、このころのインドは政治的には当時のソ連と仲のよい社会主義国とみなされていたため（と言っても社会主義国が誇る、国民への福祉や生活の保証というものは一切なく）、NATO（北大西洋条約機構）からは敵扱いされ、COCOM（対共産圏輸出規制）の貿易規制対象国になっていた。そのため、NASA（アメリカ航空宇宙局）などが汎用プログラムをインドに注文する際もいろいろ規制があり、今南インドの都市バンガロールにあるような大規模なプログラム工場というものはまだなかった。

考えに耽っていた町田が突然デザートメニューをパタッと置いた。

「誰もやる人がいないなら、我々でやればいいじゃないですか？」

と言った。梨絵も発言するのを待っていたように、

「わたし、父の関係で、何社か汎用プログラム開発している会社を知っていますので、一

度当たってみようと思います。」

すると、町田が椅子から乗り出して、

「僕は、インド側で必要なインプット、アウトプット情報や、変数の情報など指示できると思います。あと、インドから送って来たプログラムをテストしたり、日本語のコメントを付けたりできますけど。」

小林は、順次プラバカルに通訳していたが、どんどん話が勝手に進んでいくのを心配して、

「でも、そんなに簡単に日本企業が個人に仕事をくれるかな？」

と日本語で言い、すぐに英語でプラバカルに日本企業の事情を説明した。プラバカルが不思議そうな顔をして、

「**Why don't you have your own company, Takeshi?** (自分の会社を作ればいいじゃないですか。)」

と言った。町田が、

「ほんとですよ。小林さんが会社作ったら僕も行きます。」

と勇んで言った。梨絵は口には出さなかったが、真剣な顔で、小さく頷いて、「私も」というジェスチャーをした。町田が、

「2、3百万円もあれば、株式会社が作れます。僕も少し資本参加できると思います。梨絵さんもいくらか出せますよね。」

「ええ。」

梨絵は遠慮がちに返事したが、顔は真剣にそのことを考えているようであった。プラバカルがみんなの様子を窺いながら、

「**Kobayashi Company Limited?** (株式会社小林はどうですか?)」

と大声で切り出すと、町田と梨絵が勢いで拍手した。

「**Stop, Stop, Kobayashi Company** はやめてください。」

小林は逸る皆を制したが、会社設立に関しては以前から考えていたようで、

「会社は、いずれは作りたいたいと思ってるけど、自分の会社というよりは「パンを分け合う仲間」という、英語の **Company** の語源になった仲間作りができればいいですね。」

町田が、

「そしたら、会社名はこの中華料理屋の名前と同じ名前で、「梁山泊」はどうですか？ 考えたら、このお店は何か縁が深そうだし、我々のような、はみ出し者にはぴったりの会社



名です。」

「はみ出し者、はいいですね。」

小林が笑いながらフォローした。

梨絵が、

「水滸伝のように、これから続々と豪傑が集まってきそうな名前ですね。でも、梁山泊はこの店と同じなので、例えば、「梁山泊情報システム」はどうですか？ 英語だったら **Ryozanpak Information System**、略してR I S。これだったら、覚え易いでしょう。」

町田も、

「すごくかっこいいですね。」

と賛成した。小林は一々プラバカルに訳していたが、

「みんな、はしゃぐのはいいけど、問題は、仕事内容ですよ。仕事がなければ砂上の楼閣ですよ。」

梨絵も町田も乗り気だが、小林は今まで一人で働いてきた経験から、世の中そんなに甘くはないということを身にしみて感じていた。仕事が一ヶ月もなければ、どんな硬い結束も簡単に崩れるだろう。毎日三度のごはんが食べられて、文化的な生活ができること、サラリーマン時代では当たり前のこのことが、独立するとどれだけ大変なことか、町田も梨絵もまだ理解っていないと思った。しかし、臆病になって何もしないで手をこまねいているより、リスクを最小限に抑えて、できることからスタートするべきである、という気持ちまでには高まっていた。

「梨絵さん、もし可能であれば、プログラムを外注してくれそうなお客さんを見つけてもらえますか？ 町田さんは会社があるから、梨絵さんの情報を待ってから、今の会社を辞めるかどうか、考えても遅くないと思うけど。」

それを聞いた梨絵は、彼女にしてはおかしなくらい町田をじっと見て、なにか町田に言ってほしいような素振りをした。町田がそれを見て、頭を搔いて切り出した。

「実は、先週会社に辞表を出しちゃったんです。」

小林はしばらく声が出なかった。町田の辞職の件は、誰もプラバカルに通訳しなかったので、プラバカルは意味がわからず、にこにこしながら

「たけしのグループがやってくれるなら、最悪、インドへの支払いは、お客さんからお金もらったあとでいい。」

そして続けて日本語で、

「頑張りましょう」

と言った。梨絵も緊張した面持ちで、

「明日からでも、客先を回ってみます。」

小さな顎を引いて少し上目使いで、覚悟したように言った。町田は会社に辞表を出した件を小林に黙っていたことで、顔を真っ赤にしていた。それでも持ち前の元気良さで、

「今日は、事実上の旗揚げですね。会社が長く続いたら、今日を創立記念日にしたらいいと思いますが。」

混乱しているのか、恥ずかしさを紛らわせているのか、かなり先の話をした。小林は、急に現実化してきた会社創設を考えて、緊張の方が先に立って、顔がこわばった。

お店を出た後、プラバカルは町田と梨絵に握手した。

「**See both of you in India.**（今度は二人ともインドで会いましょう）」

そう言って別れた。それから、小林はプラバカルを連れて大阪の繁華街を案内した。プラバカルは、大阪の人々が東京と比べて、とても人懐こい様子を見て、

「**Osaka is much similar to India than Tokyo.**（大阪は東京よりインドに似ている）」

とつぶやいた。

家に帰ってからは、仕事になった時の具体的な手順、連絡方法、お金をどのようにして送金するかなどを話しあった。

## 第二話 R I S 発進

梨絵は次の日から、営業活動を開始したようであった。父親の田村弘明も、梨絵が元気になって働く気持ちになってくれたので積極的に応援した。そして、小林に連絡して、会社設立資金を提供したいと申し出たが、小林はその申し出を断った。小林は、一緒に働く梨絵や町田が資金を持ち寄るのには賛成だが、まだ、どうなるかわからない状態で、他人の資金を入れるのは反対であった。会社を自分のものにしたいという独占欲からではなく、すぐに仕事がない状態で、資金は必要なかった。どっちみちならゼロからスタートして、みんなで会社を育て、その育っていく過程を皆と共に一喜一憂したいという純粋な気持ちからであった。うまくいって会社の規模が大きくなれば、その時点で株を発行してスポンサーになってもらえばよいと考えていた。

1988年8月1日、小林と梨絵と町田は自己資金だけを集めて会社を発足させた。名前は梨絵の提案通り、「梁山泊情報システム」。略称はR I S（リス）。町田の提案で、創業日を皆で梁山泊に集った7月3日とした。皆で株を買い、小林が60%、梨絵が30%、町田が10%の資金提供をした。会社の体裁として登記簿には出資額に応じて、小林が社長、梨絵が専務、町田が常務という役職にした。事務所は大阪の中心、堺筋本町のビジネス街で、中小企業が立ち並ぶ古いビルの一室を借りた。たった7坪、一部屋の中に、電話が一つ、FAXが一つ、パソコンが一つという、怪しいブローカーのような事務所であったが、初めて持てた自分たちの事務所に、みんなワクワクしていた。そしてこれが後に日本のIT産業を救う世界的企業になろうとは、このときは誰も想像していなかった。

パチンコをやった方なら、おわかりになると思うが、パチンコの玉が出始めの時、あわてて玉を移し換える大きな器を用意して来ると、それからぴったりと玉の出が止まったりするものである。R I Sもそのような状態であった。何日もかけて会社の社訓、ルールを細かく作成したのはよかったが、それをあざ笑うかのように、仕事が全く入って来なかった。小林は、以前から主にコンピュータトレーニングで生計を立てていたが、このところ会社設立のために予約を取っていなかった。そしてあわてて客先に電話をしても、すぐには決まらなかった。小林が一番怖れていたことが起こっていた。梨絵は元々営業向けで

はないが、父親のツテを頼って、毎日のように注文受注の可能性のある企業を訪れていた。

ある損害保険会社の応接室で梨絵がソファーに座って待っていた。中年の役員風紳士が入って来て、梨絵に挨拶した。

「山本です。あなたのお父さんにはお世話になりました。あれっ。今日はお嬢さん、お一人で来られたんですか？」

不思議そうに梨絵を見た。

「ええ、あの実は、今日は御社の情報システムのことでおうかがいしたいと思ひまして。」

名刺を交換した後、山本は「R I S 梁山泊情報システム、取締役専務 田村梨絵」と書かれた名刺を黙って見ながら

「それで、ご用件は？」

梨絵は先に具体的な用件を告げていなかったため、山本が商売の話と聞いて、急に落ち着きがなくなったのを見た。仕事の話を持ち出すタイミングが見当たらなかった。雰囲気的にもとても場違いなことを言おうとしているように思われた。それでも何とかしなはいといけないと思ひ、勇気を出して無理矢理切り出した。

「あの、今度、新しいコンピュータ会社を仲間で作らして、つきましては、何か、汎用機（注、銀行が使っているような大型コンピュータのこと）のプログラムの仕事をいただけないか、と思ひて参りました。」

山本は驚いた顔のまま、気が抜けたような話し方で、

「あっ、そうですか？それは、私では、わからないので、担当者をお呼びで来ましょう。」

そう言っただけで部屋からさっさと出て行ってしまった。しばらくして20代の営業担当者連れて来た。

「すみません、仕事の内容は、こちらの鈴木君に言ってもらえますでしょうか？」

言い終わらない内に、自分は部屋の外に歩いて行った。部屋を出たところで、思い出したように鈴木をお呼びで、何か耳打ちした。鈴木も笑って、了解しましたという顔をした。

「あの、新しい会社を設立されたとか。」

「はい。」

「従業員は、何名いらっしゃいますか？」

梨絵はこの質問に答えるのが、いつも辛く思っていたが、相手の顔色を窺いながら、

「現在3名です。」

と言った。すると鈴木は、

「はあっ。」

と気の抜けたような声を出して、にやけた顔つきに変わった。

「それで、ご用件は？」

梨絵は、もうこんな雰囲気ではだめだと思ったが、今更、尻尾を巻いて逃げられないと思ひ、顔を赤くしながら、小さな声を絞り出すように言った。

「あの、汎用のプログラムで、こちらで開発させていただけるものがあつたら、一度トライアルをさせていただきたいのですが。」

鈴木は、わざわざ梨絵の前で、足を組み直して、

「3名で？ ですか？」

とオーバーに驚いたように言った。

「うちは今、3名ですが、実は、インドに開発部隊がありまして、ほとんどの開発をそこでやります。」

「インド??」

鈴木の声はひっくり返っていた。前にも言ったが、このころのインドといえば精神世界か、さもなくば、貧乏、混沌というイメージで、ビジネスの世界、ましてやコンピュータのような先端技術とは無縁と、ほとんどの日本人は思っていた。梨絵は、もう何を言っても無駄だと思ひながら、どうやって帰ろうかということを考えるようになっていた。

鈴木の方は、どうやら、この可愛らしいお嬢さんを、もっとからかってやろうという気になって来た。

「インドというと、僕はカレーくらいしか思い浮かびませんが。」

そう言って、笑いをこらえているようであった。梨絵は帰りたくても帰れない状態に追い込まれていた。

「インドは、頭のよいエンジニアがたくさんいますし、値段が日本の10分の1でできます。」

「プログラムを海外で開発させて、機密が守れますか？」

「ええ、それは、エンジン部分をサブルーチンとして海外に発注して、日本側でメインを作成します。」

「ほう、よくご存知ですね。」

女性にしては、プログラムの事が、少しは分っているというようだという、皮肉な褒め方をした。鈴木はプログラムの話より、梨絵自身に興味を持って来たようで梨絵を帰さないように、無駄な質問を繰り返した。そしてにたと笑って、

「あの、もしよければ、会社終わった後、近くの喫茶店かなんかでもっと詳しい話を聞きましょうか？」

鼻の下の伸びた助平顔を見ないように、梨絵はあわてて、

「すみません、失礼します。山本様によろしく。」

と逃げ出すように外へ出た。

仕事を取りに行く先の、一事が万事このような状況で、中には、プログラムは特に機密性が高いので、当時社会主義のインドに対しては、COCOM（対共産圏輸出規制）違反になるのではと忠告する会社もあった。梨絵は毎日夕方会社に戻ってきては汗を拭い、お尻から椅子に倒れこむように座った。そして、誰もいないときは机に伏せて悔し涙を流すこともあった。君江が以前言っていた、女性に対する差別が今になって身に沁みて分った。今までは父親や会社の看板が、自分を守ってくれたから活躍できたのであり、身包みを剥がされたら、ただの世間知らずのお嬢さんとしか世間は見てくれなかった。

「これからは生身の人間として戦わないといけない、負ける訳にはいかない。」

涙目で小さな唇を噛みしめた。

小林は梨絵とは別に客先を回りプログラムやトレーニングの営業活動をしていた。8月は真ん中にお盆があり、どこも休み気分で、すべては盆明けということも影響した。町田はこの中では一番マイペースで仕事をしていた。営業に出ないために会社にいることが多かったが、インドに注文を出すときのシステム作りをしていたので、儲からないが、忙しそうに働いていた。

「お盆はみんな休んで、盆開けに勝負を賭けましょう。」

小林はそう二人に提案したが、小林が休みの日に会社を覗いてみると、町田と梨絵が来ていた。小林は社長としての責任を痛感した。今までは一人で商売していたので、うまく行かないときは自分一人が我慢すればよいことであるが、従業員がいると、そういう訳にはいかない。どこの雇い主でもやっている従業員の日々の生活の面倒を看るという当たり

前のことが、自分にはこんなに難しいことであったかと、正直自信をなくしかけていた。色々理想に燃えてスタートした新会社であったが、ただの世間知らずの集まりで終わってしまうかも知れないという不安が小林を覆っていた。

小林は、事前に給与に関するルールも作っていた。会社が全く儲からない場合は、三人共給料を取らない。儲けが、全員の給与に満たない場合は、儲けを平等に3等分、利益が出た場合は、会社に利益をプールするという決まりを作っていたが、最初の月は、どうも最悪の全員給料なしになりそうであった。小林は普段から、ゲンを担いだり、神頼みしたりすることを軽蔑していたが、どこの神さんでも助けてくれたらという気持ちになるまで追い込まれていた。町田が、

「神社のお札でも買って貼っときましようか？お祓いでもしてもらいましょうか？」

と半ば冗談で言ったが、小林は気を持ち直して、

「最後まで経営責任を自分達の手から離さない、というその決意が大事で、僕は神様に任せたくない。」

と真面目な顔で答えた。そして8月31日が終わり、9月に入った。

9月1日、小林は朝早く出勤し、後から来た梨絵と町田に深々と頭を下げた。

「すみません、わたしの努力不足、経験不足で最初の給与を払うことができません。もし今月も同じことになったら会社を解散したほうがよいと思っています。」

町田も梨絵も沈痛な面持ちでこのことを聞いていたが、梨絵が沈黙を破った。

「私は一ヶ月や二ヶ月給与が入らなかったからといってくじけません。それより先月の反省を皆でして何がよくなかったのか、これからどうすればよいか皆で考えませんか？」

町田も梨絵に続いて発言した。

「僕も貧乏にはなれているので心配しないでください。ラーメン1つで一日過ごせます。」

小林と梨絵は、張り詰めた雰囲気破る町田の冗談（多分本人は真面目なのだろうが）に、思わず微笑んだ。小林は、あらためて二人に向かって話した。

「もし僕らが、この一ヶ月で反省するとしたら、多分、プログラムの注文という大口を狙いすぎたかも知れないね。やっぱり、トレーニングのような地道な、貰いやすい注文を積み上げていくべきじゃないかな。」

梨絵も、

「わたしも、父の知っているところだったら簡単に注文をもらえと思ってたのが、甘かったのだと思います。やっぱり、もっと科学的な営業分析が必要だと思います。」

小林は科学的と聞いて、首をかしげた。

「営業分析といっても、日本の営業は今まで科学的ということからかけ離れたところにいたように思いますが。営業マン個人の能力に頼るとか、縁故に頼るとか、客に極端に媚びるとかして、商売を取ってきたような気がするんですが。梨絵さんは大学で営業分析に関して、何か学びましたか？」

「いいえ。」

町田が割り込んだ

「実際、ゴルフで回っているうちに商売が決まったとか、恥ずかしい、かくし芸を見せてお客さんに笑ってもらい、それが縁で可愛がられたとかですね、酒に酔わせてハンコ突かせたとか、周り見たらそんなばっかりですよ。」

梨絵は沈痛な面持ちで、

「わたしそんなことできません。」

と困ったような声をあげた。小林は、

「アメリカのように、大学で学んだことをそのまま企業でも取り入れて、その延長として実践しているのではなくて、日本では、大学では崇高な理論を教えるところで、企業に入ってから、初めて実際の世の中の仕組みを学ぶようなものですから。」

町田がメガネを拭きながら、

「日本の大学で、崇高な理論も、きっと教えていませんよ。先生も学生も、大学は遊ぶとこだと思ってるんじゃないですか。僕が大学行かなかったのもそういう理由があります。大学の先生が商売して成功したというのは、聞いたことがないですよ。ね、梨絵さんどう思います。K大ではどんなカリキュラムだったんですか？」

「わたし法学部で商学部ではなかったんですが、それでも、教養に経済理論や、マーケティング理論というのはありました。ただ世界経済というような大きな観点から観てるので、今言ってるような小さな商売には応用できないと思います。」

小林が、

「つまり、こうゆう小口の商売に関しては、理論すらなくて、未だに徒弟制度ということですね。じゃあ、我々が理論を作ればいいじゃないですか。」

町田が驚いて、



「理論を作るって、具体的にどうするんですか？」

「簡単にいうと、行き当たりばったりの状態ではなくて、法則をつかむことです。さっきのゴルフの話や、かくし芸の話は、突き詰めると、客の信頼を得るということじゃないですか？この人だったら安心して注文できる、という気持ちにさせることですよね。会社の規模が大きいというのも、客を信頼させることの一つです。これらのことは現場にいると全然違ったことのように思えるけど、「客の信頼を得る」ということで集約できると思うんです。だから会社が小さくて、ゴルフができなくて、かくし芸を持ってない人でも、何か他の方法で客の信頼を得たらいいと思うんです。」

「チョムスキーが言った、深層構造みたいなもんですか？」

町田は自分の知識を見せびらかせて、人から褒めてもらいたいというところがあり、時々本筋からトリップして話を逸らしてしまうことがある。

「ちょっと違うように思うけど。」

間をはずされた、というような気の抜けた声で答えた小林は、続けた。

「梨絵さん、できたら今まで営業に行っとうまくいかなかった点や、気になった所を全部カードに一項目ずつ書いてみて、それをグループ分けして見てはどうでしょう。そしてグループ名を付けてみれば、なぜ、そういうグループを作ったかという理由が自ずから分るはずですよ。その後、テーブルにグループ分けしたカードを並べて、全員で話し合ったら、いろいろ解決策も出て来るように思えるのですが。」

「ええ、やってみます。」

町田がにやっと笑って、

「それ、川喜多次郎のK J法ですよ。ブレインストーミングからスタートするんですよ。」

小林は町田の知識自慢に、泣くような声を出して、

「その通りですが、あの、今は理論解説より、我々の経験したものを、どんな方法で料理するかを話す方が大事だと思います。今回、インドでプログラム作業をさせるアイデアがあって、コストの面では、どこよりも安くできるというメリットがありますが、逆に、それ以外のところは、この会社にメリットがありません。コストの安さというメリットが、他のデメリットを合わせたものよりオーバーしないと、注文にならないと思います。その課題を解くために、自分だけでなく、全員が討論できる方法論が必要な訳です。それが、たまたまK J法だと思うんですが。」

梨絵がつかさず、

「わたしは賛成です。すぐにやってみます。」

町田が目をギョロツトさせて、

「僕も基本的に賛成ですが、それとは別に、何んか、こう、運をこっちに向けるための、お祓いでもしてもらったほうがよいのでは、と思うのですが？」

小林は、町田なりに色々心配してくれているのを感謝しながら、でも、ここは自分の信条をはっきり言うべきだと思った。

「今のところうまく行かないのは、運が悪いんじゃないくて、きっと何か欠けているんだと思うんです。」

町田が感心したように、

「さすが小林さん、絶対に、運が悪かったと言わないんですね。」

「運というのは、最後に吹く風のようなもので、徹底的に努力して、最後に自分ではどうしようもないところで起るものだと思う。だから運が良い、悪いは、我々にとったら、どうしようもないことで、逆に、「悪くても仕方ない」と諦められるじゃないかな。諦め切れないんだったら、それは、たぶん運が悪いんじゃないくて、我々の努力が足りないからじゃないかな。僕は、この会社を最後まで自分たちの責任で経営したいと思っています。神様に経営してほしいです。」

町田が小林の勢いに背を反らせて感心した。

「なるほど、力強い意見ですね。普通の人だったら、普段、宗教は関係ないと言っているけど、困った時は神頼みするのに。小林さんは強いですね。」

梨絵も小さくうなづいた。

梨絵が話題を変えた。

「あのすみません、小林さんのことですが、今いろんな会社に教えに行かれてますけど、この事務所でも教えてみてはどうでしょう。今はパソコンが一台しかありませんが、私のパソコンも持って来て、少しずつ増やしていけば、ここでも教室ができるように思えますけど。」

町田が割り込んで言った、

「僕のパソコンも持って来ますよ。でも梨絵さん、もし、ここでA I C A Dを教えるんでしたら、一本のソフト代だけでも百万円ですよ。確かにトレーニング費は普通より高く

取れますが、元手が必要ですね。」

小林が、

「確か、A I C A D オフィシャルトレーニングセンターとして登録すれば、トレーナー用にソフトを安く分けてくれると聞きましたが。」

町田が難しそうな顔をして、

「でも小林さん、最近審査が厳しいみたいですよ。今のところオフィシャルトレーニングセンターに登録しているのは、立派な教室を持っている大手だけです。我々のような駆け出し企業を登録させてくれるかどうか？」

「当たって砕けろですね。僕、明日にでもA I C A D 社に電話してみます。」

### 第三話 トレーニングセンター

翌日の金曜日、A I C A D社に電話して、オフィシャルトレーニングセンターの登録基準を書いた紙や登録用紙をF A Xで送ってもらった。町田が言ったように、必要な教室の規模、講師の数、そして会社の資本金に至るまで、ありとあらゆる条件がすべてR I Sは圏外であった。小林はがっかりしたが、取り敢えず登録用紙に全て書き込んで、A I C A D社にF A Xした。

週が開けて月曜日の朝、F A Xが入った。なんとA I C A Dからのオフィシャルトレーニングセンター内定通知であった。狐に摘まれたような気がして、3人とも顔を見合わせた。町田が、

「それにしても早い通知ですね。何か、間違いでないといいんですが。」

驚いた声を出して、F A Xをもう一度読み直したが、間違いではなかった。小林が、

「もしかしたら、社長のミスター、オーハラが手を回してくれたのかも知れないですね。とにかく電話をしてお礼を言います。」

小林が電話をすると、社長は先週からアメリカ出張中であった。誰にお礼を言えばいいのか分からなかったので、A I C A D営業部長の梶にいろいろ聞いているうちに、意外な人物の名前が浮かび上がって来た。小林は電話を切ってからもしばらく声が出ずぼやっとなっていた。町田が待ちきれずに

「ねえ小林さん、どうだったんですか？」

小林は体がじーんと痺れたようになってしまい、顔だけが熱くなっていたが、ようやくゆっくりと話し始めた。

「あの、梶さんが言うには、うちの登録をまとめてくれたのは、守山さんと言っていました。」

「えーっ」

町田だけでなく梨絵まで驚きの声が出てしまった。

「守山さんが、金曜日の内に、こちらからF A Xした登録用紙を持って、一つ一つ関係部署を回って、一人一人に頭を下げて、承認を取ってくれたと言っていました。」

梨絵も町田も、崎田の紹介で、守山がA I C A Dジャパンに入ったのは知っていたが、

小林と守山の今までの確執を知っていたので、二人とも驚いたまましばらく黙ってしまった。しばらくして梨絵が沈黙を破った。

「守山さんは、きっと小林さんに恩返ししたかったんだと思います。」

「別に僕、何もしてないけど。」

と小林が無表情で言うと、町田がにが笑いしながら、

「小林さん、007の町田が何も知らないと思ってるんですか？」

梨絵が

「でも、とっても心が温まるような話ですね。これこそ神様が助けてくれたのではなくて、小林さんが彼を助けてあげた立派な結果だと思います。」

町田も感動して、

「確かに、これは運がいいとかどうかという話しではないですね。やっぱり、普段からいいことしないといかんのかなあ？」

小林は頭の中で、守山との過去を想いだし、二人が話していることも聞こえないくらい、長い時間ぼやっと立っていた。

あくる日、宅配便でA I C A Dから荷物が届いた。中を開けると、A I C A Dオフィシャルトレーニングセンターの認可証が入っていた。そしてそれに加えて、A I C A Dの最新バージョンが一箱あり、教育用5ライセンスと書いてあった。町田が驚いて、

「無茶苦茶何でも早いんですね。」

小林も、

「でも、いきなりA I C A Dを送って来られても、こっちは資金が足りないから、払えないかも知れない。確か教育用でも一ライセンスが20万円くらいだったように思うけど。」

町田が箱の中から請求書を探し出した。おそるおそる請求書を見ると、商品の単価、合計が0になっていた。請求書の下の方に、「寄贈」という印鑑が押されていた。町田が、どもりながら言った。

「す、すごいですよ。た、ただですよ。百万円もらったようなもんじゃないですか？」

小林も感動して、

「我々にとっては、百万円よりもっと価値のある贈り物ですね。昨日はぼやっとしてて、守山さんにお礼の電話ができなかったけど、今からしてみます。」

小林が電話すると、あいにく、守山は今日から出張で、来週まで帰って来ないということであった。代わりに営業部長の梶に丁寧にお礼を言った。梶は、

「うちのユーザー向け雑誌の来月号に、御社がオフィシャルトレーニングセンターになったニュースを載せますから、御社の特長を書いたものや、写真など送ってください。関西方面のスクールが今までなかったのだから、お客さんからトレーニングの問い合わせがあれば、紹介してもいいですか？」

小林は降って湧いたような話の連続に、一瞬頭が一杯で、理解するのに少し間が空いたが、

「それは勿論、是非よろしく申し上げます。」

と返事した。小林は、めずらしく興奮していた。ただ、色んなチャンスが出来たというだけで、実際にお金になった訳ではないので、気を静めて落ち着いて、このチャンスをもどのようにしてものにしていくかを考えようと努めた。町田も梨絵も小林の方を向いて、同じように興奮しているようであった。

急いで三人で、スクールのことについて話し合った。まず、PCも机も足りなかった。もっといえば部屋も、約7坪一部屋しかないのだから、スクール用机を置くと、自分たちの机が置けなくなるくらい狭くなった。そこで取り敢えず、二人掛けのテーブル二脚を買うことにし、PCは、元ある一台に三人が自分の家からPCを持ち寄ることにした。最大四台のPCで、トレーニングができる。トレーニングメニューも急を急いだ。メニューはA I C A D雑誌のニュースに載せてもらえると、広告代わりになり、高い広告料を払って広告しなくても済む。活かせるチャンスは全て利用しないと、経費がいくらあっても足りなくなると思い、三人はその日夜遅くまで作業した。

## 第四話 データベースの高山

A I C A D社に資料を送り、テーブルや椅子などの注文を終えて、作業が一段落した時に町田が言った。

「せっかく、我々コンピュータで飯を食ってるんですから、こうゆうシステム管理から請求書の発行まで、データベースを作って一元化したらどうでしょうね。」

小林が、

「そう簡単に言うけど、町田さん作れます？」

「僕が作ると時間がかかりますが、僕はデータベースの専門家を知っています。」

「でも、我々はその人に払うお金がありませんよ。」

小林は、町田はシステムには堪能だが、経営のことが、全く分っていないのではと思った。

「大丈夫です。その人、今失業中でぶらぶらしていて、暇だからただで作ったげると言っていました。」

小林は、ただほど高いものはない、ということが身に滲みていたので、断ろうと思った時、先に梨絵が発言した。

「その方、町田さんのお友達なんですか？」

「いえ、実は、私が東京の専門学校にいた時の先生なんです。先生と言っても、まだ30前ですけど。あの～話せば長くなるんですが。いいですか？」

小林も梨絵もどうぞ、とういうようにかるく頭を縦に振った。

「こう言っちゃーなんですが、専門学校の先生っていいかげんな人が多いんです。最初に担任になった先生なんかほとんどプログラム知らなくて、理論ばかり教えていたんです。その理論も古臭いもんで5年前のコンピュータの話を未だにしている人でした。あと周りを見たら、.コンピュータの実務経験がなくて先生している人もいて。コンピュータは実践の学問でしょ、信じられませんよね。そんな中で、元大手銀行の電算部にいた、高山先生と出会ったんです。なんか銀行と問題があって辞めたみたいで、場違いな所にいるように思えるくらいピカーでした。その先生の授業では、日常の暮らしのシステム化を教えていました。生徒に、自分の身の回りをシステム化する課題を出して、その生徒に発表させて、あとで先生がもっとこうの方がよい、という提案をするんです。ただその提案の

仕方が、普通じゃなくてすごいんです。」

町田は興奮して目をギョロギョロ回した。

「生徒が発表したその後に、まずフローチャートを黒板に細かく書いて皆に見せて、それぞれの項目に一番相応しいハードとソフトを割り当てていきます。それで、いきなりパソコンを取り出して、黒板に書いたフローチャートのコーディングをするんですね。大きな画面のモニターを使って、その場で学生に見せながら、説明していくんです。丁度、将棋や囲碁の解説みたいに、これがこうなるとああなるとか、ここのステップを違えると、ここを修正する必要があるとか。とにかく、同時通訳のように速いんです。僕はただ驚きの目で、口をぽかんと開けて聞いていました。」

小林が口を挟んだ

「町田さんの話して、その方がすごい方だというのは分りましたが、いま失業されているのはどうしてですか？」

「ええ、それなんですよ。何でも速いんで、辞めるのも速いんですよ。」

小林と梨絵は町田特有のギャグだと思って、町田の次の言葉を待った。町田は君江がいたらもっと積極的に突っ込んでくれると思いながら、

「そう、性格は別に悪い人じゃなくて、逆にとても丁寧な人なんです。人の悪口を言ったのを聞いたことがありません。ただ、頭の回転が速すぎて、周りの先生達が皆バカに見えてしまうんですよ。と言っても決して高山先生が、他の先生達をバカにしているではないんですが、彼と一緒にいると、彼の仕事振りがすご過ぎるんで、どうしても比較されて、皆に劣等感を持たせてしまうんですね。それで、先生達の仲間にも入れなくて、いつも1人でぼつんとしていました。本人は飄々として、別に気にもしていない様子でしたが、色んな妬みとか、やっかみとかあって、意地悪されて結局辞めることになるんでしょうね。」

小林は、

「結局、器が大きすぎて、扱える人がいないんでしょうね。」

梨絵がつかさず、

「小林さんだったらできるんじゃないですか。」

「さあそれはどうか分かりません。「初めに技術ありき」ではないと思います。技術さえあれば、客が付いて来るというのは、我々のような小さな会社では成り立たないと思います。我々はまず客のニーズに合わせてサービスを展開すべきです。先月のプログラムの営業で、それがよくわかりました。」



町田が残念そうに、

「じゃ、断るんですか。」

と聞いた。小林は考えながら、

「いえ、でも一度会ってみて話を聞いてみます。こちらの事情も説明して、例えばコントラクターのような形で、仕事が出てきた時だけ仕事をしてもらう、ということだったら可能だと思います。」

あくる朝、高山が、朝一番の新幹線に乗って、東京から訪ねてきた。高山は背が高く太っており眉毛が太かった。丁度、西郷隆盛のような雰囲気があった。梨絵は外出しており、小林と町田が対応した。

「昨日、町田くんから電話あって、ご迷惑と思いましたが来てしまいました。」

「町田さんから話は聞いています。コンピュータ全般にお詳しいとか。」

「いや、コンピュータというより、私は色々世の中のことを分析するのが好きなんです。コンピュータはその延長です。」

その後小林は現在の会社の状況を説明した。そして、現在の状況では新しい社員を雇う余裕がなく、スポットで仕事をしてもらうのが可能であれば、仕事が出てきた時に、問い合わせたいということ話を話した。高山が尋ねた、

「いや、御社のことは、今のお話でよくわかりました。ただ所々わからないところがあるので、質問してもよろしいですか？」

「はい、どうぞ。」

「インドでプログラム開発も考えられているということですが、例えば、そのような感じで、私でできることは、私にも仕事をいただける可能性がある、というように解釈していいでしょうか？」

「ええ、コントラクターという意味では、国内、海外同じです。」

「現在お客さんは、何社くらいありますか？」

「今のところレギュラーのお客さんはなくて、スポットで可能性があるのが10社くらいでしょうか。まだこれから客の開拓をしていくところです。ただ、スクールもスタートする予定なので、生徒さんの数は1ヶ月で20人くらいを予定しているのですが。」

「仕入先は、A I C A D ジャパンだけですか？」

小林は、質問の意図が分からなかったが、別に隠すことはないと思い、

「今のところそうですが、他のソフトを扱うようになったら、仕入先を増やしていこうと思っています。」

今まで遠慮していた町田が、にこにこしながら、

「どっちがインタビューしているのか、分かりませんね。」

と茶化した。高山が太くごつい指で頭を搔いて、

「いや、すみません。つい普段のくせでいろいろ聞いてしまっただけ。」

そう言いながら、周りに張ってある禁煙の張り紙や、社訓を見た。

「社内禁煙はいいですね。私も賛成です。あの、社訓に書いてある、全員が「さん付け」で呼びあうというのは、どういうことでしょうか？」

小林が

「これは社員だけのことですが、社員全員を平等に扱うため、「さん付け」で呼び合うという決まりです。」

「そうですか、それは面白い試みですね。私もこれから町田君と呼ばずに、町田さんと呼びたいといけませんね。」

町田が照れて

「何か、先生に町田さんと呼ばれると気持ち悪いですよね。僕も先生の方が呼びやすい。」

高山が、

「でもせっかく規則を作って、新しい試みをしようとしているんですよ。僕は賛成ですよ。僕は部外者かも知れないが、できたら「さん付け」グループに入れてもらいたいです。」

小林は、自分の生徒であった町田に、丁寧な態度で話す高山に良い印象を持った。

「ええ、そう言っただけであればありがたいです。これだけは心底そう思っている人ではないと、絶対にうまくいかないと思います。」

「では今日のところは、小林さん、町田さん失礼します。」

その後、小林は、町田に高山の印象を語った。

「この間の町田さんの話では、どんな怪物かと思っていたのですが、とても紳士でいい方でしたね。」

「そうでしょ。僕や小林さんにはすばらしい人に映るのに、なぜか他の人にはいやな奴

に見えるんですよ。たぶん普段から実力がなくて威張っている人は、自分の実力を見透かされるからじゃないですか？その点小林さんは、普段からオープンで、何も隠していることがないんで、彼にも自然に対応できるんだと思います。」

次の日、小林と町田が外出しているときに、宅配便でフロッピが送られて来た、差出人は高山であった。町田が小林より先に帰って来て、梨絵からフロッピを受け取った。小林がその後すぐに帰って来た。町田が言った、

「小林さん見てください。ほらこれですよ。」

「何ですか？」

スクリーンを除き込んだ。スクリーンには「R I S 統合システム」というタイトルが大きく書かれてあり、その下に目次があった。町田が解説するように真ん中に座った。小林と梨絵が両脇から立って見た。

「これが顧客テーブルで、会社の住所、電話番号から、トレーニングのお客さんか、プログラムのお客さんかということをし分けできるフィールドがあります。それだけじゃなくて、もし新しいフィールドが必要な場合は、自分で作れるようにカスタマイズ機能まであります。こっちの仕入先のテーブルはA I C A Dのレコードが例として入っていますが、ソフト購入に必要なコード類や、その他のフィールドは全てありますし、我々が将来A I C A Dからソフトを仕入れて、お客さんに販売しても対応できるように、全てのレコードがリレーショナルにリンクできるようにしてあります。最終的に、このレコードが請求書に渡せるということです。」

小林と梨絵は、初めて見る本格的なR D B（リレーショナルデータベース）の画面を、目を丸くして見た。

「町田さん、僕今思ったんですが、A I C A Dにもこのデータベースが利用できるように思うのですが。図面ファイルが多くなって来ると、ファイル名を見ただけで、一々どのファイルが何の設計図だったか覚えていないでしょ。ましてや、他人が描いた設計図なんて、ファイル名からだけでは全く判断できません。そこでデータベースを使って、図面の名前、詳細、グループ名、作成者などの情報を入れておき、それから検索して、目的の図面を探すことができるじゃないですか？」

町田が割り込んで、

「選んだ途端に、図面が画面に立ち上がれば尚いいですね。」

小林もエキサイトしながら、遠くを見るような感じで、

「そう、それでサーバーからの一元管理にすれば、どの席に座っていても、いつでも希望の図面が取り出せるじゃないですか？あと、これとは別の話しですが、タイトルや縮尺、部品表とかあるでしょう。今、これらの項目は後から文字列として別を書いて挿入していますが、図面のデータベースからプロパティーを読み取って、このRDBにリンクしたら、値などは自動的に入るようになりますね。」

町田も目を輝かせて

「小林さんの言われたことで、僕も気づいたんですが、図面からプロパティーを取り込むだけではなくて、逆にRDBから、図面を操作できるかも知れませんよ。つまり部品表に書かれた、部品コードや値を変化させたら、部品の絵自体がそれに連れて伸びたり、縮んだりして、正しいサイズに直されるということもできるでしょう。」

梨絵も思い出すように、

「私、どこかの雑誌で読んだことがあるんですが、確かそういうのを、「パラメトリック設計」と言うんですよね。車の設計用の汎用コンピュータ用CADではすでにあったと思いますが、AI CADのアプリケーションとしてはまだ出てないように思います。」

3人はとても興奮して話していたが、ふと現実に戻ると、この人数で、長い開発期間をかけてソフトを作って売るといようなことは、夢のような話であった。今でも給料が取れていないのに、資金の回収が何ヶ月後になるか分からないような、開発の仕事はできなかった。小林も急に現実に引き戻された感じで、力が抜けたようになった。

「いろんなことができる、ということが分っただけでも、とても今日は有意義だったと思う。高山さんのソフトをしばらく事務に使わせてもらったら、RDBでどんなことができるのか、というアイデアがもっと出て来ると思う。取り敢えず、我々は今月、給料が取れるように働いて、余った時間で長期計画を立てるしかないと思います。」

梨絵も高山のことを考えて、

「そうですね、こんな素晴らしいソフトを作れるのですから、きっと近い将来、私たちと一緒にやっていくことになるような予感がします。」

## 第五話 プレゼント

8月と比べて9月は、8月に仕掛けた営業の反応が少しずつ出て来て、毎日ではないが、日に2、3時間の出張授業が入って来た。それでも微々たる収入であった。A I C A Dの雑誌のニュースは、9月の末にユーザーに届けられるということで、小林はそれまで待ち切れなくて、企業回りの営業に出ることにした。

例のK J法を使って、8月の問題解析をしたところ、企業回りの営業に関しても、いくつか具体的な対策が浮かび上がって来た。まず外回りの営業は、必ず2人でペアーを組んでいくことにし、小林と梨絵、小林と町田、町田と梨絵というように、回る企業によってベストのペアーを組んだ。ペアーを組んでみて分かったことだが、一人では気づかなかつた点を、片方が気づいてフォローできるということがわかった。丁度漫才コンビのように、一人が説明している間に、もう一人が客の反応を伺い、適当な突っ込みを入れることができた。営業資料も充実させ、担当者の忙しい時には資料を置いて帰り、後ほど電話で説明した。

毎日そんなこんなで忙しくしている割には、9月も全員の給与分の半分も利益を上げる見込みがなかった。小林は、苦しい時の崎田頼みで夕方誰もいなくなってから崎田に電話した。

「おう、小林さんどないや。」

「あんまりうまく行ってない。何かいつも困った時だけ電話してるようで、申し訳ないけど。何が悪いんか、自分達だけでは、なかなか分らんので崎田さんに聞いてもらおうと思うて。」

「ほんなら、コンサルテーションフィーを貰わなあかんな。」

そう言って笑った。小林は今までの経過を話し、色々皆で努力し、A I C A Dの守山まで協力してくれているのに、未だに大した収入になっていないということを説明した。崎田は徐に言った。

「決定的に、抜けてることがあるな・・・」

一旦、話をそこで止めて、小林に、

「何か分かるか？」

というように焦らした。小林が答え倦んでいると、

「小林さんは、A I C A D社とお客さんだけ回ったらええと思てんのか？」

崎田は、小林がまだ気づかないか、というような馬鹿にしたような声を出した。

「小林さん、A I C A D単体でトレーニングすることないやろが、建築や機械のアプリケーションソフト開発会社に挨拶に行っ、アプリケーションの販売と教育を両方やったらええんちゃうの。」

小林はT E S時代に自分で「A I M E C H A」という機械用アプリケーションソフトを作った経験があり、アプリケーションは、いずれ自分達で作ろうと思っていた。そのため、今、他のソフト開発会社のディーラーになると、いろいろとしがらみが出て、自分達でアプリケーションソフトを作って売るときの障害になるのでは、という心配があった。ただそれは、崎田から言わすと、技術者の勝手な夢想、我がままと言われるもので、崎田は、例の大声をあげて、

「他社のアプリケーション販売ディーラーをしながら、自分達も似たようなアプリケーションを開発して、なんの問題もあるか！」

と叫んだ。さらに追い討ちをかけ、

「そんな殿様発想で、よう会社作ったね。」

となじった。町田も梨絵もどちらかという技術者肌で、小林と同じような発想しかできなかつた。

「ありがとう助かった。」

小林が感謝すると、

「今度からコンサルタント料もらうからね。」

とからかった。

あくる日、小林は早速A I C A Dアプリケーションソフト開発会社に電話して、自分達にA I C A Dアプリケーションの教育を任せてほしいと頼んだ。幸い、ほとんどのアプリケーションソフト会社の担当者が以前A I C A Dのセミナーなどを通して小林を知っていた。どこのメーカーも、開発部員は花形なので成り手が多かつたが、教育まで手が届かず、各社共、新人や、開発に向いていない、いわば落ちこぼれ技術者に任せっぱなしにしていたので、今まで客とのトラブルが多かつた。そのため、是非代わりにやってほしいというアプリケーションソフト会社が、予想より多く、多くの会社が喜んで、機械、建築、

電気、プラント用などのデモ用アプリケーションを、R I Sに送ってくれることになった。

小林は、今までの経験で、教育は商売になると踏んでいた。各ソフト会社やディーラーがそれほど力を入れていない割には、トレーニング料金は、1人1時間1万円が相場で、おまけにソフトのトラブルシューティングと異なり、うまく修理できなかったのでお金が取れない、というトラブルは発生しない。考え方によっては、ソフト開発より確実な収入と言えた。でも、それにしても、今から送ってもらうアプリケーションが到着してからマニュアルを見て練習し、客に教えるようになるまで、何日も掛かる。9月の収入には間に合いそうになかった。

9月も最後の週に入った、ある日、梨絵が近くのフランス菓子屋から、シャレたショートケーキを買って来て、紅茶を入れてくれた。普段、飲み物は自分で入れるという規則を作っていたので、小林はありがたいと思いながら梨絵に聞いた。

「梨絵さん、ケーキありがとうございます。でもお茶とか自分でやりますから。」

そう言うと、町田が、

「まだ気付いてないのか」

というように梨絵と目配せした。町田は言った。

「普段会社のことは、色々気が付いてアイデアを出すのに、自分のことは、全く分かっていませんね。小林さん、何歳になったんですか？」

小林は

「あっ」

と言って、やっと自分の誕生日だということに気付いた。こんなに毎日、不安で忙しい中でも、仲間が、自分の誕生日を忘れないでいてくれたことに体が熱くなった。頭を搔いて、

「いや、ありがとう。ほんとうに忘れてた。もう33才か。」

年を取ったなあ実感した。町田が封筒を差し出した。

「これ、二人からのプレゼントです。」

小林は封筒が薄いので、現金や商品券などであれば困ると思いながら封を切って中を見た。

—— ただ働き券、有効期間1988年12月末まで、2枚 ——

小林が意味を計りかねているのを見て、梨絵があわててフォローした。

「わたし、実は、こんな形で出すのは失礼じゃないかと反対したんですが、町田さんが、小林さんはユーモアがわかる方だから心配ないって。」

「小林さん、これは冗談ではなくて、僕と梨絵さんとよく話し合っただけなんです。小林さん、いつも僕らの給与のことを心配してくれてありがたいんですが、僕らは、小林さんが思うほど困っていません。むしろ、慌てて目先の注文ばかり取っては、折角いろいろ仕掛けたことまでダメになるような気がします。僕らも、商売が全然分かってない訳でなくて、ある程度仕掛けた効果が出てくるタイミングなどは、分かっているつもりです。」

「わたしも、小林さんが私たちのために、余計なエネルギーを使われているような気がして、もし、今の時間を将来のことにもっと使えたら、きっと結果的には、もっともっと良いものになるような気がします。だから、12月というデッドラインを決めて、この月までにビジネスの見込みがなければ、思い切って解散するというはっきりした目標にしようとして話し合ったんです。」

小林は二人の突然の申し出にびっくりして、すぐに判断できなかった。しばらく頭を下に向けて考えていた。確かに二人の言っていることは間違いでないと思った。また、我々は仲間だと言っておきながら、自分一人でいろんなことを判断し過ぎていたと反省した。

「仲間を信頼しないと。」

小林は、神妙な顔をして話し出した。

「僕も、もっと早くみんなと相談して、長期計画を練ったらよかったと反省しています。すみません。ここはお二人の言葉にあまえさせてもらおうと思います。」

9月の末になり、A I C A Dの雑誌が全ユーザーに発送された。それから2、3日もしない内に、トレーニング依頼の電話が鳴るようになった。依頼内容は、A I C A D単体より、建築用アプリケーションソフトや、機械用アプリケーションソフトも一緒にトレーニングできるか、という問い合わせが多く、準備していてよかったと思った。当時、トレーニングセンターは、東京以外にはR I Sしかなく、東は名古屋付近から西は九州にいたるまでの広い範囲で問い合わせがあった。見る見るトレーニングの予定が埋まっていった。三人はうれしい悲鳴をあげ、忙しく働いた。そしていつの間にか三人に笑顔が戻っていた。十月が終わり三人は初めて正規の額の給与を取ることができた。



そして十一月になると、事務処理用のPC 1台を含めて、4台のPCがフル稼働し始め、事務処理はトレーニングの合間を縫って行わないといけない程になった。そして、高山のRDBソフトが事務処理の時間短縮に威力を発揮した。最初に入力したデータが、客先への見積もり、請求書発行、支払い確認、バランスシート、確定申告用シートに至るまですべてリンクされ、最小の入力で、最大の効果を発揮した。

## 第六話 AI 図書館

12月に入って、トレーニングを順調に続けていた。およそ1ヶ月先の予約まで入り、三人がそれぞれ得意なところを担当して教えた。一度歯車が回ると、不思議なことに、トレーニング以外の注文も入り出した。例えば、客がトレーニングの最中に、色々不便を感じている問題を講師に話すことがあり、その問題は、ちょっとしたプログラムを組むことで、解決することが多かった。次回のトレーニングまでに見積もりを作り、トレーニングの前後に、その見積もったプログラムの説明をすると、ほとんどの客が、

「そんなに安く解決するのであれば、注文する。」

ということになった。この時、初めてわかったことであるが、客が、この問題解決にかけるコストが何百万円も掛かるだろうと推測していたものが、実は、一日の作業でできたりするような簡単なものであったりした。逆にプログラムのバグ修正のように、客にとって、

「大きな問題ではないが、毎回そのエラーメッセージを見るのが気持ち悪いので、ちょっとそこだけ直してほしい。」

というような問題解決の方が、何日も作業しても、解決しない難問だったりした。

客と直接交流するトレーニングは、ある意味で、絶好の営業の場であった。今まで、客先に何度足を運んでもなかなか本題にも入れなかったプログラム受注が、今は客の方から尋ねてくれた。

まだまだ気を緩めるような状況ではなかったが、トレーニングによって基本的な収入が確保できる目処がついたため、小林は、今まで放っておいた、高山の件をなんとかしたいと思い始めた。小林は、トレーニングに来る客、一人一人に次のような質問をすることにした。

図面ファイルは、現在いくつあるか？

図面ファイルの管理ソフトがあれば買うか？

そして、町田と梨絵にも質問の主旨、内容を詳しく説明して、お客さんの反応を報告し

てもらおうことにした。

数日後、町田が言った。

「図面管理ソフトですけど、お客さんに口で説明するだけではなかなか理解してもらえないようですね。」

梨絵が、

「確かに、興味は持ってもらえるようなんですけど、実際のをみないと、分からないようです。」

小林も、

「僕も、お客さんから、似たようなことを言われました。実物がないと、真面目に取り合ってもらえないというか。」

町田が、小林の表情を窺いながら、

「高山先生、あ、いえ、高山さんに作ってもらいましょうか？」

小林はとても迷っていた。

「でも、開発前にお金を払う余裕はありませんよ。開発を外注する場合は、著作権、販売権など、いろいろ取り決めが必要だし。」

町田が、煮え切らない小林を見て、

「小林さんらしくないですね。なにを消極的なことを言ってるんですか。いつもの小林さんなら、こうゆう場合、解決策をいくつも出してくるのに。」

「ええ、すみません。確かにここのところ忙しくて、疲れてて、難しいことを考える心の余裕がないかも知れないね。」

梨絵が割って入った。

「わたし、インドのこともあって、外注で開発を頼む時の契約方法とか一応勉強しました。明日までに雛形を用意してきますので、小林さんと町田さんに見てもらいましょうか。」

小林も町田も梨絵の雛形を待つことにした。

あくる日、梨絵が業務提携契約書を二人に見せた。A4の用紙十枚にびっしりと文字がならんデータ。町田が一枚目に目を通しただけで、読むのを諦めた。

「しかし梨絵さん、よく一日で、こんなに書けましたね。」

「実は、元ネタがあって、それをこの会社に併せてカスタマイズしました。それからイ

ンドに依頼するときのために、英文のものも用意しました。」

「さすが法学部。」

町田が感心した。小林が質問した。

「僕も、今すべて読むことができませんが、およその内容を説明してもらえますでしょうか？」

「まず基本的な権利関係として、プログラムの著作権と著作権はR I Sに属するということ。開発を請負った者は、検収終了後一年間は無料でバグを修正すること。依頼者の機密を守ること。あと、開発者でなくても、メンテナンスできるように、フローチャートとソースコードをまとめて提出すること。開発者に対するお支払いの項目ですが、プログラム内容と、個人によって契約が異なってくると思いますので、ブランクにしてあります。重要なところはおおよそのくらいでしょうか？英文のものもほぼ同じ内容です。」

小林が、

「今回高山さんのケースですが、お支払いは、ソフトが売れて、R I Sに支払いが完了した月の末払いくらいでないと難しいですね。その代わりに、通常の報酬が売り上げの15%のところを20%にしたらどうでしょう。」

町田が、

「じゃあ、僕、早速今から高山先生、あ、高山さんに電話してみます。」

行動の早い高山は、町田から電話を受け取った次の日の朝、東京を発ち、お昼ころR I Sを訪れた。小林と梨絵は、まず契約書を高山に見せて説明した。高山は、あまり読まずにさっさと署名してしまった。それからあとは、町田がソフトの説明をした。A I C A Dが初めてという高山は、町田からC A Dに関する説明を聞いた。高山は町田から30分ほど説明を聞いたあと、

「P Cを1台貸してくれませんか？このソフトでできるかどうか調べたいことがあるので。」

と言った。ちょうど午後から、小林と梨絵が出張トレーニングにでることになっていたのも、一台を高山に貸した。

高山は、自分の持って来たソフトをインストールすると、P Cの前で姿勢を正し、ぐっと画面を覗んだ。文楽人形の、鬼女の仕掛け面のように、今までの穏やかな顔は一転し、

鬼の形相に変わった。町田でさえ途中で話しかけるのを遠慮する程であった。

夕方になって、高山が、

「町田さん、ちょっと見てください。」

と声をかけた。すでに、いつもの穏やかな表情になっていた。町田が高山のところに歩いて行きながら、

「どうですか？ ソフト作れそうですか？ どのくらい日にちが、かかりそうですか？」

と尋ねた。高山は、町田の話が聞き取れなかったような顔をし、町田が横に座ってから、PCの画面を前に説明をした。

「勝手に「A I 図書館」というタイトルにしましたが、これはいつでも変更できます。まず、入力画面ですが、図面のファイル名の選択画面がこのように出てきますので、ファイルを選択すると、次は作成者や、いろんな属性を入力する画面になります・・・」

高山は、最初の入力方法を説明し、例として3つの図面ファイルに属性を入れた。次に検索方法を説明した。そして検索したファイルをヒットすると、A I CADが立ち上がり、その図面が現れた。

「まあ、流れとしてはこんなもんですか。」

高山は落ち着いた様子で町田に聞いたが、町田は驚いて、口をぽかんと開けていた。

「あの、もしかして、これ完成してるのと違います？」

「ええ、もっとデータを入れてテストしてもらわないといけませんが、およそリクエストされていたものは、中に入っていると思います。ちょっとトイレをお借りできますか？」

丁度その時、高山がトイレに行くのと入れ替わりに、小林と梨絵が出張から帰って来た。町田が興奮して言った。

「小林さん、梨絵さん、この画面見てもらえます？ 「A I 図書館」がもうできちゃってます。」

小林と梨絵は、出張用のカバンを持ったまま、町田のところに歩いて行き、画面をみた。トイレに行った高山に代わって町田がデモを見せた。

「さすが・・・」

小林はそう言って、次の言葉を失ったように立ち尽くした。梨絵も驚いた顔を隠さず。

「世の中にこんな人もいるんですね。前に町田さんが言っていたことが、なんとなくわ

かります。確かにこの方と一緒に対等に仕事ができる人は、ほとんどいないでしょうね。」

小林は、高山がまだ帰ってこないのを確かめて、

「高山さんと一緒に仕事をする時、我々がいつも心がけないといけないのは、彼の素晴らしい力に我々が劣等感を持ったり、ジェラシーを持ったりしないようにしないといけないことでしょうね。どうしたら彼のような巨大なエネルギーを会社として使えるようになるか。それが課題ですね。」

町田が、

「小林さんが言われるのも最もですね。我々と高山さんとは、水力発電と原子力発電ほどの差があるような気がします。なんか、この半日で完成させたソフトを見せられると。我々が「バカ」と言われているみたいで、僕でも正直、ジェラシーを感じますね。」

梨絵も感心した様子で、

「でも、私たちは真摯な気持ちで、いいものはいいということだけ心掛ければいいんじゃないでしょうか？そうすれば高山さんのようないい人材がどんどん集まると思います。」

そうこう言っているうちに、高山がトイレから帰って来た。小林と梨絵を見て挨拶した。

「おおよそ完成しているのですが、何か必要なことがあったり、バグがあれば電話してください。それからシステムマニュアルは書きましたが、ユーザーマニュアルはまだありません。2、3時間いただけたら書きますが。」

梨絵が、

「マニュアル、私が書いていいですか？私、今から、データを何件か入れてみてユーザーの立場に立ってマニュアルを書いていこうと思います。」

「あっ、そうですか。それは助かります。」

最後に小林が高山に礼を言った。

「こんなに早く作っていただいてありがとうございます。このソフトをトレーニングに来た方に見せて評価してもらいます。同時にパッケージも作ってすぐに販売できるようにします。」

高山はすでに次のことを考えている様子で町田に向かって、

「町田さん、以前これとは別に、部品表データベースの話をしておられましたね。私、部品表を扱うのにRDBではなくて、マルチプランかロータス123のようなスプレッドシートソフトを使えばいいと思うんですよ。A I C A Dとリンクできるかどうか試して見

たいんですが、今日はたぶん、時間がないのではと。折角大阪に来たのですから、明日も来てその辺りの感触を確かめます。」

町田があきれた顔をして

「今日はもう十分です。あまり早くなんでも作られると、我々のスピードがついていけなくなります。」

とって苦笑いをした。

高山は翌日もR I Sを訪れ、部品表とスプレッドシートとのリンクについても夕方までにソフトを作り上げた。高山は、

「A I 図書館も、部品表ソフトにしても、今スタンドアローンですが、通常はサーバーを使ってネットワークにつながります。確かS U NマイクロからP C N F SというU N I X機をサーバーにしたパソコン用ネットワークがでていますが、残念ながら私は触ったことがないので。」

町田が、

「高山さんでもわからないことが、あるとはびっくりしました。」

「わたしはスーパーマンではありませんよ。早くから汎用機（注、銀行にあるような大型コンピュータ）に触っていただけです。パソコンは、今のところ、まだ汎用機に追いつこうとしているところで、汎用機で出来ることをどうやって安く、簡単にしようかと模索している段階です。従って、汎用機を知っている自分にとっては、パソコンが次にどうなるということはおおよそ見当がつきます。ただ、このネットワークに関しては、最近A R P A ネット関係で動きがあり、T C P / I P プロトコルが標準になろうとしています。このあたりは実際に文献を読んでトライ・アンド・エラーしてみないとわかりません。」

梨絵が、

「確か私の大学でもU N I X機を使っていたので、そのネットワークのサービスをしていた方を知っています。その人に聞いてみます。」

高山は、

「さらに、まだ何かあれば言ってください。」

と言ったが、町田が降参というように万歳して、

「我々はまだ、今回高山さんが作ったソフトも全部理解していません。ソフトを作る時間より、我々が理解するほうが時間がかかる、というのは、どんなものでしょう？」

高山は、町田の話が終わるのを待ちかねたように、時計を見ながら、

「他になければ、今日、東京に帰ります。」

と言い、荷物を担いでさっさと帰り始めた。三人は、急いで高山をエレベータホールまで見送った。

それから、客のトレーニングには、「A I 図書館」とを必ず用いることにした。客は普段と違った画面からA I C A Dが立ち上がるので、その理由を尋ねた。そしてそのときは必ず、

「A I C A Dをそのまま立ち上げますと、図面の内容や履歴がわかりません。この「A I 図書館」を使いますと、図面の整理が簡単でたちどころに、ご希望の図面が見つかります。

デモ効果があり、年内に「A I 図書館」の販売予約が数件入った。すぐに販売できなかったのは、パッケージ作りが遅れたからであった。小林は、高山のスピードに感謝しながらも、販売方法の検討や、パッケージ作りなど、到底年内に間に合わすことができなかった。



## 第七話 ネットワークの山田

数日後、「K大、コンピュータ室、室長、山田弘孝」という、名刺を持った30才くらいの男性がR I Sを訪れた。梨絵が出身校のK大に電話して、ネットワークのことで来てもらった人であった。梨絵はK大時代、ネットワークのことになると、必ず山田が現場に来ていたので覚えていた。山田の方は梨絵をあまり覚えていないようであった。

3人が山田に挨拶した。小林が遠慮しながら聞いた。

「山田さんとお呼びしていいですか？」

「ええ、私は山田です。なにか他に呼び方があるのでしょうか？」

と不思議そうに聞いた。

「いえ、大学の先生の場合、先生とお呼びするのが、一般的かも知れませんが、弊社では一応「さん」付けで呼ぼうということにしていますので。」

山田はにっこりと笑い、

「ええ、ご心配要りません。さんで結構です。それに・・・」

と言いかけて、急に黙り、そしてそれ以上話をしなかった。

まず梨絵が、A I 図書館のデモを、山田に見せた。山田は、サーバーを使ってネットワークするとA I 図書館が、どうなるかということをお口頭で説明した。

「K大は、現在UNIXネットワークのみですが、最近、SUNマイクロから「PCNF S」というUNIX機をサーバーとして、パソコンをクライアント機（注、子機のこと）にするネットワークが出ています。パソコンをサーバーにしたネットワークの動きもアメリカではありますが、まだなにも発表されていないので、いつになるか分かりません。」

山田は鞆から黄色いケーブルと、それに穴を開ける道具、そして穴の開いたところに、ねじ入れるコネクタを見せた。

「このイエローケーブルに、一定感覚でPCをつないでいけば、UNIX機とPCとネットワークでつながります。ネットワークでつながることの一番のメリットは、どのPCの前に座っても同じファイルにアクセスできることです。このA I 図書館は、現在このPCの図面しか見ていませんが、ネットワークにつながれば、サーバー内に入っている図面を、各PCから見るできるようになります。勿論、A I CADの図面だけではなくて、ワープロのファイルなど、どんなファイルでもシェアできます。」

山田は、ホワイトボードを使ってネットワーク図を描き、さらに詳しく説明した。町田が興奮して言った。

「僕ら今まで、ネットワークと言えば大型機の世界とと思っていましたが、これからパソコンもネットワークの時代になるんですね。」

「ええ、今はLANと呼ばれる会社や工場内だけのネットワークですが、そのうち、世界中を結ぶネットワークが現れると思います。」

それから町田が、梨絵が、小林が、山田に色々ネットワークに関する質問をした。質問がある程度終わりかけたころ、山田が唐突に言った。

「あの、わたしここで雇ってもらえること、できますでしょうか？」

あまりのことに三人は、しばらく言葉を失った。特に梨絵は目を丸くして硬くなっていた。小林がしんと静まった中で切り出した。

「でも、K大の方はどうされるんですか？」

「実は私、K大のネットワークを見ていますが、K大出身じゃないんです。教員でもなくて、身分的には職員なんです。」

梨絵が驚いて聞いた。

「でも、もう何年もされているんでしょう？」

「ええ、最初にK大にネットワークを引いたときからいるんですが。実は私はアメリカの高校を出て、すぐに現地のSUNマイクロ社に入社したんです。仕事で、K大のネットワーク導入時にこちらに来たんですが、その時、K大の教授の勧めもあって、SUNマイクロを辞めて、こちらに残りました。ところが何がどう間違っただのか、私の身分は教員ではなくて、職員になったんです。教授に聞いてみると、わたしが高校しか出ていないということを知らなかったようで、最低大学を出ていないと、教員にはなれないということでした。アメリカでは、このような場合でも働きながら大学へ通い、単位を取っていただけるのですが、職員が学生になるためには、通常の大学入試テストを受けて、合格しなければならないという話で、日本の高校を出た人でも、ほんの一握りしか入れないような難しい受験に、どう考えても、アメリカの高校を出た私が合格する訳がないじゃないですか？ それでもなにかチャンスがあるかも知れないと思い、今まで頑張ってきたんですが、特に国立大学なので、全く融通が利かなくて、飼い殺しのまま、今日に至っています。」

梨絵がすまなさそうに、

「すみません、私そのような事情を全く知りませんでした。」

「毎年、春になると新生が入って来て、山田先生と呼んでくれたのですが、僕が教員ではなく、職員と分ると、次第に僕に対する態度が変わってくるんです。エリートが集まって来る大学なんで、尊敬してくれる眼差しと、「なーんだ」と失望した時の表情の落差が激しくて、僕は何か、くやしくて、くやしくて。ネットワークに関しては誰よりもよく知っているという自信があるのに。それに時々、教授の論文も、私が直してあげたりもしているんですが、このばかげた大学入試制度の中では、私の身分は最低です。それで思い切って別の会社で働いてみようかと思っていたところです。」

小林はありがたいと思いながらも現実を話さなければならぬと思った。

「ご覧の通り、我々のベンチャーも始まったところで、山田さんを抱える余裕はありません。いま我々ができることは、コントラクターとして仕事がある時にお願いするくらいですが、それでよろしければ。」

山田もどっち道、K大の仕事をすぐにやめることもできないので、丁度よいオファーだと言ってくれた。

## 第八話 3次元の白川

ある日、若い建築家、白川則之がA I C A Dのトレーニングを受けに来た。トレーニングも終わりかけになって

「このC A Dで、パースが描けますか？」

と質問をした。梨絵はパースの意味がわからなかった。

「建築ではよくあることですが、通常建築図面は2次元なので、立体になった時のイメージが、建築家と客とでうまく伝わらないことがあります。そのとき立体イメージを描いてあげるのですが、ただのいい加減なスケッチではなくて、通常の2次元図面から一点透視や2点透視とって、定規を引いて、正確に立体を作る計算方法があります。」

「もしかしたら、町田さんがよく知っているかも知れませんね。」

梨絵は町田を呼んだ。

「パースですか。確かに計算方法がわかっているならば、今のA I L I S P (注、リスプと読む) という開発言語を使って絵を描くことができるかもしれません。さっそくやってみましょうか？」

「あとパースだけではなくて、本格的な3次元はどうでしょうか？ 例えば、3次元の建物モデルを作って太陽の角度を計算すると、日照権などの問題がシミュレーションできます。銀行の支店のレイアウトも、今は設計図の段階で監視カメラの位置などを計算するのが大変ですが、3次元モデルが正確に作れると、そのようなことも簡単にできるようになると思います。」

町田は、しばらく考えていた。

「問題は、今のA I C A Dのデータが、2次元データなので、A I C A Dの中では3次元を表現できません。今3次元をやるとしたら、A I C A Dのデータを一旦、A I C A Dの外に出して、D O S上で計算させて、C言語かなんかでグラフィックス画面を造るしかありません。なんか、たいへんなことですよ。一つのソフトを開発するようなもので、我々の規模で、できるようなものではありません。」

梨絵が、

「でも、3次元グラフィックスは魅力がありますね。素人のお客さんは2次元の建築図

面から実際の建物を想像するのはとても難しいですから、3次元モデルで実際の建物みたいに画面に現れると、とてもいいんじゃないですか？」

「とにかく、それをするためには、3次元アルゴリズムとC言語（注、ベーシックなどと同じような開発言語の一つ、ベーシックは一般ユーザー向けで、C言語はプロが使用する）をよく知っているプログラマーが必要です。まあ一度、高山さんに聞いて見ます。」

その時はその話で終わった。

町田が高山に電話をかけた。

「いや、私は汎用機がメインだったのでC言語はそんなに得意ではありません。」

「どんな言語でもすぐ覚えられないじゃないですか？ちょっとやればなんとかなりませんか？」

「いや、そういう訳にはいきません。特にC言語はUNIX機の言語として開発され、パソコンでも開発言語の中心になっていますが、本当にC言語を自分の言葉のように扱える人は、まだ日本にはたくさんいません。でも、ちょっと待ってくださいよ。昔アメリカのベル研にいた人を知っています。日本からベル研に留学した人で、佐々木潔さんと言ったとおもいます。今日本に帰っていると思います。確か大阪ですよ。」

「大学の先生ですか？」

「一時期、大学で教えていたように思うのですが、今は、別に教えていないようですが。以前、ご自宅の電話番号をもらったので、僕のデータベースに入っていると思います。気さくな方だった、という印象がありますから、いろいろお聞きになってみるだけでも、いいんじゃないですか。」

## 第九話 C 言語の佐々木

小林は、高山に教えられた電話番号に電話をした。小学生の女の子らしい声がした。

「はい、吉川ですが。」

名前が違っていたので、番号間違いか、すでに引越してしまっていないか、と思ったが、とりあえず聞いた。

「すみません、佐々木潔さんのお宅ではありませんか？」

「佐々木潔はお父さんです。」

子供の声がした。何か事情があると思いながら、

「お父さんは、今いらっしゃいますか？」

「今いません。」

「連絡できますか？」

「天王寺公園にいるのんちゃうかな？」

近くに誰かいるようであった。そしてすぐに母親の声と代わった。神経質そうなビリビリする声だった。

「失礼ですけど、どなたでしょうか？」

「小林たけしと申します。コンピュータの関係で、佐々木さんに協力をお願いしようと思って、お電話しました。」

「ええ、佐々木潔は、夫でしたが、3年前に離婚しまして、今はどこにいるか？」

「先ほど、お子さんが、天王寺公園にいらっしゃるとか？」

「いえ、時々ボランティアで公園掃除をしているとは聞いていますが。詳しいことは。」あまり話したくないようだったので、仕方なく電話を切った。

天王寺公園は、隣に当時無料の天王寺動物園があり、広大な敷地を、自由に行き来できた。土木労働斡旋所があるあいりん地区、通称釜が崎に近く、常時浮浪者の溜まり場になっていた。

小林は、佐々木潔という名前を頼りに、日曜の朝から、天王寺公園の管理者や、動物園の受付、食堂などを聞いて歩いた。昼過ぎまで歩いたが、誰も彼を知らなかった。仕方なしに、まさかとは思ったが、公園の中で、ダンボールで家を作って、寝ている人たちに聞

いてみた。胃液が口から出ているような、すっぱい匂いが段ボールに近づくと従って強烈に匂った。

「佐々木潔さんという方、ご存知ですか？」

段ボールの中から返事があった。

「さて、わし知らんな。兄ちゃん、ちょっと待ってや。仲間に聞いてみるから。おいお前、佐々木なんちゃらいうの知ってるか？」

別のダンボールから声がした。

「佐々木言うたら、もしかして、あの、アル中の「ささやん」かな。」

小林が、声の主のところへ歩いていった。

「ささやん」やったら、もうちょっと行ったところにおるわ。

「あの、佐々木潔さんでしょうか？」

男は、ダンボールの中で毛布を巻いて横になっていたが、昼間なので寝ていなかった。左手にカップ酒のグラスを持っていた。小林をじろじろ見ると、目を細めて警戒心のある声で言った。

「なんで、わしの本名知ってんの。」

「あの、高山浩二さんご存知ですか？」

「ああ、」

と言って思い出すように、

「あの、データベースの先生？」

「はい、その高山さんから紹介してもらったんですが、小さなコンピュータ会社をしています小林と申します。」

どうやら、当局の見回りや、ヤクザの勧誘ではないと分かったらしかったが、警戒を解かなかった。

「それで何か？」

「あの、コンピュータのことで、聞きたいことがありまして、来たんですけど。何でしたらその辺で、お昼でも一緒にいかがですか？」

「お昼やったら、今、持ってるから、その辺に座って話しまひよか？」

そう言って、半分に切れたコロッケを差し出した。小林は、佐々木の煤で黒ずんだような手から、それを受け取って、公園の景色の良い場所にしゃがんで、一口食べた。

「すみません。お昼いただいて。」

「かまへん、かまへん、どっちみち、昨日の残りや、ゴミ箱あさったら、こんなん何ぼでも出てくるから。」

小林の口の動きが止まった。ここで吐き出すと、話は終わりだと思い。今、口にあるものを呑み込んだ。

「闇鍋と思えば。」

昔、学生時代に闇鍋で、草履を食べさせられたのを思い出した。佐々木は、50にまだなってないと思われるのに、老人のような皺と多くの白髪があった。

「あの、すみません。今回、佐々木さんにプログラムのことで、いろいろお尋ねしたいことがありますて来ました。」

佐々木は皺の目でにやりと笑った。

「もう忘れた。」

「高山さんに聞いたのですが、昔ベル研でC言語のプログラマをされていたとか？」

にやっと笑い、

「Cの前のBも、その前のBCPLも知ってたよ。そやけど、もう何年もコンピュータ見たことありまへん。」

過去形で答えた。小林は、なんとか佐々木の心をつかみたいと思い、手に持った残りのコロッケも口に入れた。佐々木は、小林が残りのコロッケを食べたのを見て目を細めて笑った。

「あの、折角佐々木さんにお会いできたので、もし差し支えなければ、C言語のプログラミングのことなど、お聞きしたいのですが。」

「別にええよ。なに言うたらええの。」

「実は、僕と仲間とで半年前に、小さなコンピュータ会社を作りました。元々A I C A Dのプログラムをしていたことから、取り敢えず、A I C A Dをベースとした、プログラミングの開発を考えています。アプリケーションとして、3次元のグラフィックスを開発するのに、C言語ができる人が必要なんです。高山さんに聞くと、日本では、佐々木さんが最もよく知っているというように聞きました。また、高山さんによりますと、佐々木さんにとって、日本語よりC言語の方が、母国語じゃないかと言ってましたが。」

佐々木は、別に否定もせずに、先ほどのふらふらした調子とは見違えるほど、はっきりと話した。



「確かに、C言語は、その生い立ちから、その後の方言、多様化まで、自分と一緒に育って来た兄弟みたいなもんやった。丁度、一番ええ時の自分と重なってたしな。あんたさっき、A I C A D言うてましたな。わしのベル研時代の知り合いで、マイケルというインド人が、確か働いてたところやね。」

小林は、マイケルと聞いて思い出した。

「あの、僕、以前アメリカのA I C A D本部に行ったことがあって、その時にマイケルさんとお会いしました。」

その言葉に佐々木は急に目を開いて、

「あ、そう、会うたことあんの。それでマイケルは元気やった？」

「ええ開発部長をされていました。」

「そうやろ、そうやろ、彼はベル研でもピカーやったからな。」

「あの差し触りなければ、お聞かせいただきたいのですが、佐々木さんはなぜ、いまプログラムをされてないのですか？」

思い切って聞いてみた。

「ええ、色々あってね。」

佐々木は、初めて会った小林に好感を持ったようで、少しずつ自分の過去を話し始めた。

「わしがベル研に入ったのは、1970年やったな。わしは当時の電電公社から、次世代の電話機の研究のことで派遣されたんや。わしは、だんだん電話機よりコンピュータの方に興味がでてきて、まだその時は、IBMしかなかったときに、デニスやケンがUNIXというOSと、その言語としてC言語を開発しておった。」

小林は、コンピュータの伝説の人物である **Dennis M. Ritchie** や **Ken Thompson** の名前がぼんぼん飛び出すので、とても驚いた。今を時めく、UNIXやC言語開発の初期段階で、佐々木さんがいたということと、今の姿があまりにもギャップがあり、そのことを聞くのが恐ろしいことのように思えた。佐々木は、昔の澁刺とした自分を思い出したように、遠くを見ながら、懐かしそうに語った。

「IBMのコンピュータは高こうて、我々研究者には手が出なんだ。そんで、ライセンスフリーのOSと言語を作ってみようちゅうことになったんや。わしも、モニタリングさせてもらたんで、英語より、先にC言語を覚えたくらいや。」

「ベル研に何年おられたのですか？」

「最初、公社から2年の約束で来たんやけど、だんだんコンピュータの方が面白くなって

な、結局、会社の帰国命令を聞かんと居り続けたら、首になったわ。それでも、ベル研で7年間雇うてもらった。それで1979年やったかな、日本に帰る前に、世界一周旅行しようと思て、東周りに、ヨーロッパ、トルコ、革命直後のイランとか経由して、インドに着いたんや。インドはちょうど、同僚のマイケルが、休暇で帰ってて、いろいろ案内してくれた。」

小林は、

「偶然ですけど、僕も1978年から79年の一年間インドに留学していました。」

今度は、佐々木が驚く番であった。

「インドで、何してはったんです？」

「ヒンディー語を勉強しに行ってたんです。」

「はあ、ヒンディー語を、そんならコンピュータは元々専門やなかったんですか？」

「ええ、語学が専門でした。」

佐々木は、急にうれしそうな顔になり、

「わしら、インドに初めて行った時、アメリカや日本と全然ちやいまっしゃろ。ものすごいショックでしたけど、何か、こうゆう世界もおもしろいんじゃないかと思て、しばらく滞在して、当時流行っていたヒッピーの真似事をやったね。えーと、お宅の名前なんでしたかね。」

「小林です。」

「小林はんも、ヒッピーになって、インドをうろうろしました？」

「いえ、僕は学生でしたから、ただ学校の休みの時は、インドのあちこちに貧乏旅行して周りました。ちょうど大学にインド各地から来た友達がいる、その友達の家を渡り歩きました。」

「しかし、なんちゆうても、言葉ができるのはすごいね。」

「インドは、どうして好きになられたんですか？」

「あの当時、ビートルズがインドに行ったり、ヨーロッパ伝統の精神世界を見直そうというブームで、文明を離れて、自由に暮らすヒッピーに憧れたんやね。何と云うか、コンピュータをやってるもんは、ストレス多いから、まったく逆の環境に憧れたりして。ベル研の研究者のなかでも、インド行きはブームやったよ。中には、1年以上も研究室に帰らん奴もおった。わしは、ビザが切れたんで、しかなく日本に帰ったんやが。」

「日本ではどうでした？」

「最初、ベル研にいたということで、大学の非常勤講師になって、それが縁で、結婚もしたけど。なんか自分にしっくりけえへんのね。大学も、学生がみんなイエスマンで張り合いがない。教師も、力がない割には、威張ってる奴ばかりで、おもしろい奴がおらん。企業に勤めるのも考えたけど、日本の企業は。一旦、自由を知った者にとって、とても勤めれるもんやないよ。そんでやね、大学、専門学校を転々として、女房、子供にも愛想をつかされて、今は職がのうて、ここで乞食をしています。」

「あの、もしよろしければ、一度、うちの会社に来ていただけないでしょうか？我々は佐々木さんをフルタイムで雇うお金はないですが、プログラムを作っただいて、その都度の報酬になります。みんな差別や自己実現できない現状に不満があって、スピニアウトした者の集まりですが、理想に燃えて情熱を持って働いています。」

佐々木はしばらく小林をじっと見ていたが、徐に、

「分かった、小林さんも、何かおもしろい人みたいなんで、一回お伺いしまっさ。」

## 第十話 1988年忘年会

数日後、昼過ぎに佐々木がふらりと会社を訪ねた。小林が、天王寺公園で会った時とは見違えるほど、こざっぱりした服を着て来た。

「一応、小林さんに恥じかかせたらあかんから、いっちょらいの服を着てきましたで。」

小林は、あわてて白川に連絡を取ったが、昼間は忙しく、夕方なら、という返事であった。町田が、

「あの、高山さんも別の用事で関西に来てる、言うて連絡ありました。この際、みんなで忘年会しましょうか？」

、小林が、

「ほんと、この会社に集まった人たちと、一度いろんな話をしてみたかったころですから、いいじゃないですか。佐々木さん、夕方遅くなってもいいですか？」

「あんた、わしに尋ねてんの？わしはご存知の通り、歩いていて止まった場所が住所やさかい。」

梨絵も声はずませて

「わたし、山田さんも呼んでみます。それから梁山泊を予約しておきます。」

結局、中華料理屋、梁山泊には、小林、町田、梨絵、(データベースの)高山、(ネットワークの)山田、(3次元の)白川、(C言語の)佐々木という7人のメンバーが集まった。仕事の話しにもなると思い、梨絵は気をきかせて、別室を取ってくれた。乾杯の後、町田がメンバーを紹介した。

「一応、社長の小林たけしさん。」

そう言って、小林の顔色を窺った。

「一応、という意味はですね、以前社長と呼んで、嫌がられましたんで。ちなみに、ご存知とは思いますが、この会社では、全員「さん」付けで呼ぶことになっています。次は、紅一点の田村梨絵さん。そして私は町田信二です。われわれは、R I Sの社員ですが、あの方の方は、コントラクターとして仕事をしていただいているか、これからしていただく可能性のある方々です。できましたら、自己紹介をしていただけますでしょうか？」

町田が、高山に振った。

「現在、東京に住んでいます、高山和彦です。今日はたまたま関西に来ていて、みなさんにお会いすることができました。よろしくお願いします。」

町田がすぐにフォローした。

「あの、高山さんは、データベースの達人です。「情報整理の魔術師」と呼ばれてます。」

高山がびっくりして、

「「情報整理の魔術師」は、初めて聞きましたが。」

「ええ、今、僕が考えました。はい次の方。」

「山田弘孝です。主にUNIXのネットワークをしています。この会社とは、UNIXとパソコンのネットワークと関係でお世話になっています。」

「山田さんは通称、ネットワークの山田。」

「白川則之です。私は建築技師で、実はRISの客として来たのですが、いつの間にかメンバーにさせられました。」

そう言って、頭を掻いた。小林がフォローした。

「白川さんは、3次元アルゴリズムでお世話になっています。今後、隣におられる佐々木さんと一緒にできれば、3次元グラフィックスソフトを開発していただこうと考えています。」

「と、いうことで、通称、3次元の白川。」

佐々木がお猪口を持った手をあげて、

「佐々木潔です。仲間うちでは、「ささやん」で通っています。はっきり言うて、わしプログラム覚えてるかどうか不安ですが。車の運転みないなもんやと思てますんで、なんとかかなりまっしゃろ。実際、この話もらった時、なんぼ断ろうかと思たんですが、その都度、そこに居はる小林はんに励まされまして。ただ、白川さんが真面目な方みたいで、わし見たいな浮浪者相手にしてくれるかどうか？」

白川が割り込んだ。

「私も、と言え、御幣がありますが、世界中を放浪する癖がありまして、世界中の珍しい建物を見に行くんですが、ただ見るだけじゃなくて、その建物がある町で最低2、3

ヶ月は滞在して、町の人と一緒に暮らすんです。そうすると、その建物の背景や哲学が見えてくる。例えば、普通建築用CADソフトには、柱や梁や壁があって、実際の建物を建てるように骨組みから作って行くでしょ。ところが、発想を変えると、我々は骨組みに住んでいるのではなくて、骨組みに囲まれた空間に住んでいます。つまり、居住空間から家を考える、という発想もあると気がついたんです。だから、家設計するときには、柱が何メートル置きとか、壁の厚さを考えるんじゃなくて、まず、その部屋の用途から考えて縦、横、高さを割り出し、次に、家具や調度品を入れて、狭くなれば長さを変える、というような空間重視のプログラムを作りたいんですよ。土地のない日本では、贅沢と言われるかもしれませんが。」

「わしなんか、今、段ボール住まいやで。空間もなんもないわ。」

佐々木が皮肉な笑いを浮かべた。白川が真面目な顔で質問した。

「佐々木さん、段ボールの外はなんですか？」

「段ボールの外？ 外は、なんもないやろ。」

「違いますよ。昼には青空があり、夜は宇宙があります。時には雨も、雪もあります。」

「そう言や、そうやけど、それが、何の関係があるの。」

「あなたが、選んだのは、段ボールじゃなくて、宇宙でしょ。」

白川はにやりと笑った。佐々木は、じばらくぼんやりしていたが、

「なかなか、おもしろいこと言いほりますなあ。」

と感心した。小林も白川に関しては、元々お客さんということもあって、ほとんど、どんな人か知る機会がなかったが、今の言葉で、すごい豪傑だというように思い始めた。

それから自由に歓談した。特に白川と佐々木は3次元グラフィックスの、プログラミングに関して話しあった。2人は30分もしないうちに百年の知己を得たように意気投合した。そして、ナプキンの柔らかい紙の上に、2人でいろんな図を描いた。白川は、別のナプキンで折り紙を折って、どうやら、建物の構造を説明しているようであった。

残りのメンバーは、一緒に話していたが、これから人数が増えた場合、どのような組織運営にするかという話題になっていた。小林が発言した。

「これから、組織をどのように運営していくかということ。力のある人を雇えば雇う程、報酬も高くなって、我々のような小さな会社は、その仕事を絶やさないようにする努力だ

けで、へとへとになってしまいます。かと言って、コントラクターの状態を永遠に続けられるとは思えません。」

「私、今まで暖めてきたことがあるんですが。」

高山が言った。

「「オブジェクト指向」、という言葉をご存知ですか？ 新しいプログラミング方法です。ものを中心にプログラムを考える方法で、一番の特長は、プログラムの独立した部品化ができることです。私は、このことをプログラムじゃなくて、会社組織に応用してみると、どうなるかを考えてみました。一人一人が独立した状態で、どのように全体を形造ることができるか、ということを考えて時、オブジェクト指向で、できないかと考えてみました。ちょうど、この会社のように、縦関係より横の関係を重視したときに、従来の枝分かれのような形の組織図では表現できません。つまりジョブ関係が、上下だけではなくて、横にも、離れた別の所にもあり、これらを、線で結びつけると、くもの巣のようになって、図を見ただけでは、何を表しているのか分かりません。どのようにして、一つのプロジェクトを皆で分配できるのか？ どうすれば本当の意味での平等になるのか？ これから、色々な個性ある人材が集まっても、その人たちの個性を失わずに、組織の中に入れる手段が「オブジェクト指向」だと考えた訳です。」

山田が、

「とても奇抜なアイデアですね。正直、オブジェクト指向は、プログラミングだけのこととと思っていましたので、会社組織に利用できるとは、考えたことがありませんでした。」

「元々、オブジェクト指向は、唯物論をベースにして、分散処理方法を解いた一種の哲学です。一つ一つの部品が完全に独立しながら、全体を機能させる方法を説いたのです。ですから、この会社のように個性豊かな人たちが集まって、一つの集団を形成するという場合に、丁度、あてはまるのではないかと思います。」

小林は考え込んでしまった。

「正直、実際やってみないと、どんなものか理解できないと思います。」

と答えた。高山はフロップを小林に見せた。

「ここに、今言った、プログラムがあります。以前お持ちした、「R I S 統合システム」の拡張プログラムとして動くように作っていますから、一度試してください。」

山田が、

「それじゃあ、僕が、UNIXサーバーを用意して、会社のパソコンをネットワークし

ましよう。」

町田がびっくりして、小林に聞いた。

「小林さんUNIX機は、百万円以上するじゃなかったですか？ お金がありませんよ。」

山田が笑って、

「心配しないでください。大学で古くなったものを、いつも、もらってますんで、サーバーとして動くものを1台くらい、すぐに都合がつかます。」

丁度、白川と佐々木が、話が終わったのか、皆と合流した。白川が言った。

「あの、もしよろしければ、年末、年始、事務所を使わせてもらって、よろしいですか？」

「ええ、それは勿論、でも、まだプロジェクトの予算とか、お2人の報酬とか、何も決めていませんが。」

佐々木が酔っ払い声で、

「遊びで作るんやさかい。難しいこと言わんでええて。」

高山が割り込んで、

「丁度、こうゆう時に、私の作ったプログラムを試してもらえれば、ソフトの仕組みが、分かると思います。」

困惑している小林を見て、町田が言った。

「小林さん、高山さんのソフト、僕が動かして試してみます。自分一人で考えて、悩むのはよくないですよ。仲間を信じてください。」

最後に梨絵が締めくくった。

「こんなに素晴らしい方々に集まっただいて、私、とても感激しています。私、この会社で働くまでは、世の中のことが全く分かってなくて、嫌なこともたくさんあって、何度もくじけそうになったんですけど、その都度、小林さんや、町田さんに励まされて、何とかやって来れました。みなさんが、元気で、楽しく働けるような場に、これから、していきたいと思いますので、よろしくお願ひします。」

「いよっ、こっちもよろしく、紅一点、べっぴんさん、一丈青・扨三娘！」

佐々木が合の手を入れた。



## 第二部、後書き

第2部は、会社作りという地味なストーリーのため、1部と比べて、面白味が少なかったのではと、心配している。今回やっと、ITの豪傑を何人か登場させた。第1部を読んだデータだいた方から、

「この物語は誰を対象としているのですか？」

という質問を受けた。確かに何も考えずにスタートしてしまい。一般の読者には分からないIT用語の解説なしに、どんどん話が進んでいった。IT関係の読者だけでなく、一般の読者にも楽しんでもらえるように、書き直しをしようと考えているが、たぶん、すべて書き終えてからになると思う。まずは物語を書き切るのに、とても時間がかかり、これが当面の目標になっている。

今のところ第3部は、バブル真っ只中、第4部は、バブル崩壊後の世の中を、絡めていきたいと思っている。

私は、長編を書くのが、初めてなので、とにかくストーリーを最後まで書く、というのが当面の目標である。小説らしい表現などは、その次に考えたらいいいという風に思っている。

従ってご批評の方も、できたら、表現方法より、ストーリー展開に関するご批評を先にいただけたら幸甚である。

第2部了